

# 藤田浩子の 少し昔のこと 〈90〉

## 「べったり」の時間が減って

野生の動物は、常に外敵におびやかされながら子育てをしています。比較的高等動物といわれている哺乳類でも、お産をするときや授乳をするときなど狙われやすいでしょう。ですから生まれて来る子どもも、生まれてまもなく自分で立ち上がり、自分で歩いておっぱいを飲みにいき、いざとなれば、自分で外敵から逃げることもできるような「完成品」になるまで、母親のおなかのなかで成長してから生まれてきます。

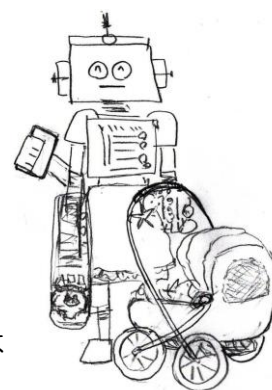
それに比べて、人間の赤ちゃんのなんと頼りないこと！ ポルトマンという学者の「高等動物になるにしたがって妊娠期間も長くなる」という理論に従えば、最も高等な人間の妊娠期間は2年間で、人間も2年間おなかに入れておけば「完成品」になって生まれてくるだろうと言われていました。けれど、2足歩行になって母親の骨盤が小さくなり、それに反して生まれてくる子の脳（頭）は大きくなり、2年間もおなかに入れておいたら出せなくなってしまう、ですから10か月で、未熟

のうちに出してしまうのだそうです。

人間は賢くなり豊かになり、お産をするときも授乳するときも外敵に襲われることもなく、未熟で生み落としても（戦争や災害がなければ）育てられるようになりました。でも1年間は母親に依存しながら人間らしく生きることを学ぶ胎外胎児です。その1年間は胎外に出ているとはいえ、半分は胎児ですから、しっかり親にくっついて育てべきときなのに、近頃は母親から（人間から）離れて「1人で」いることを強いられる時間が増えました。生まれ落ちたとたんに機械音や機械画面にさらされます。

家庭の中に電化製品が揃ったとき、子育てだけは電化できないだろうと思っていました。が、今や子育ても道具化、機械化されつつあります。

大丈夫かしらと昔人間は心配になるのです。



リレー連載 <223>

## わたしの大好きな絵本

のりちゃん

「お月さまってどんな味なんだろう」と動物たちは考えていました。ある日、亀が高い山に登ってお月様を捕まえようとしてますが、届きません。そこで次々に動物を呼んで互いの上に乗って手を伸ばしますが、だめでした。もう少しで届きそうと思うと、いたずら好きなお月さまがひょいっと逃げてしまうからです。

でも何とか皆で協力して味見をすることができました。



## 『お月さまってどんなあじ?』

マイケル・グレイニエツ 絵と文  
いずみちほこ 訳 らんか社

さてさて、そのお味は？

それは思いやりにあふれ、皆をやさしい幸せな気持ちにさせてくれること間違いなしの答えでした。

あれかなこれかなと想像していた私もほっとし、じんわりとやさしさに包まれたものでした。

和紙でできたようなほんわか暖かいお月さまや、次に出てくる動物がページの下に小さく描かれている本の作りも素敵です。